

# 駅前商店街における賑わいの背景に関する研究

—経堂すずらん通り商店街を対象として

李顕鍾

指導教員 八尾廣  
建築設計計画研究室

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1. 研究の背景

日本の都市部を歩いていると、「コミュニティ」の存在を強く感じる時がある。それは夏祭りの時期や年末年始、クリスマスやハロウィンで商店街において行われる様々なイベントの時である。この時だけは地域の人々が互いに協力し、商店街はそぞろ歩く近所の住民で賑わい、子供達が街路で遊び、駅前などの広場にはテントが設営されイベントをリードした有志の人々が互いに酒を酌み交わすといった光景も見られる。こうした都市の様相はある種のコミュニティ感、つまり人々が互いに無関係ではなく、相互に助け合える可能性というものを、人々に感じさせる。

現在、高度経済成長期により都市の急速な拡大におけるモータリゼーション化、人々のライフスタイルの変化や大型店舗の出店等により商店街は全国的に衰退の傾向にある。しかし、車なしで生活できる場所はあまり衰退しているとは思えない。特に駅前商店街は人の往来が充実していることあり、「賑わい」がある。町の顔とも言える駅前商店街の賑わいはどのような背景により今もなお生み出されているのであろうか。

### 1.2. 研究の目的

本研究では戦後の復興期から高度経済成長期を経て現代に至る歴史を持つ経堂駅北側の「すずらん通り商店街」を対象とし、その「賑わい」、「コミュニティの形成」の背景に潜む要因、条件を調査その一端を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究対象

小田急小田原線沿線のすべての駅前商店街を対象とし現地調査を行ない、近隣の住宅地との関係が深いものについて調べた。さらに、区・市が提供する都市計画図の用途地域図を参照し、■商業地域の中に埋もれている商店街は対象外とし、■商業地域の中に■近隣商業地域として線状に駅より伸びる形態をとる、商店街としての性格が明確な通りを選定した。その中でも商店街としての活気が最も感じられ、通りとしての性格が明確な経堂すずらん通り商店街を研究対象とした。

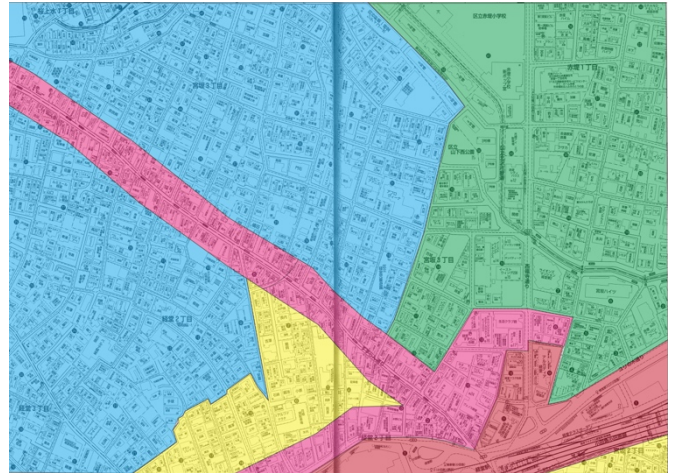


図1 用途地域図

## 3. 研究の方法

### 3.1. 資料調査

世田谷区史、世田谷区立図書館、世田谷区立郷土資料館より得られる資料から経堂の歴史及び経堂すずらん通り商店街の形成過程について資料を収集した。

### 3.2. 商店街振興組合へのヒアリング

商店街振興組合の方々へ複数回ヒアリングを行い、商店街の歴史、商店街組合の変遷、振興組合の運営状況、商店街振興に関する取り組みの経緯等に関する情報を収集した。

### 3.3. 地図情報を用いた店舗の変遷に関する調査

現在に至る入手可能なゼンリン住宅地図を用い、各年代を比較しながら商店街の発展過程や店舗構成の変遷について把握する作業を行なった。

## 4. 調査結果

### 4.1. 経堂すずらん通り商店街形成史

昭和2年に小田急線が開通し経堂駅が作られると駅から北東の方向（現在のすずらん通り）に漬物屋、菓子屋、果物屋、寿司屋と店がではじめた。すずらん商店街の歴史はこの小田急の開通に始まるが、急速な発展を見せたのは戦後である。1960年過ぎまで経堂駅の改札は南口だけだが、住宅化が進んだのは北口である。当時、滝坂道（現 すずらん通り）沿道は区内有数の人口があったと考えられ、周辺は宅地開発可能な面積が多く、農地の宅地化が進み、生活必需品や食料を扱う商店が沿道に

形成されていったと思われる。

#### 4.2. 経堂商店街振興組合へのヒアリング

商店街進行組合へヒアリングを行い、商店街の歴史、現在の概況、振興への取り組み状況、持続発展してきた理由等についてヒアリングを行った。以下にヒアリング結果をまとめる。

##### 1) 商店街の歴史について

昭和23年6月、経堂銀座会（会員59名）を結成する。その年の10月に共栄会と改称。この頃にすずらん灯を設置。昭和26に公園（現 経堂公園）を買収し経堂商店街協同組合を設立（会員60名）、経堂すずらん通り共栄会に再改称し商店街活動に入る。昭和38年7月経堂商店街振興組合として認可され区内初となる法人化となる（8月1日登記完了）。

##### 2) 商店街の概況について

現在の商店街の総店舗数、加盟店舗数、会費

総店舗数	200以上
加盟店舗数	155
会費（月額）	3,500円

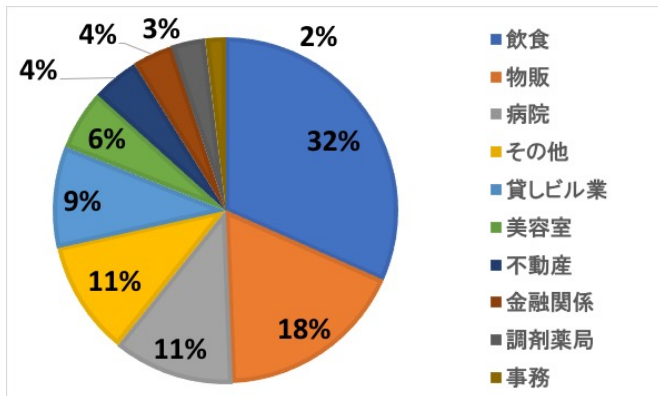


図2 加盟店舗の業種

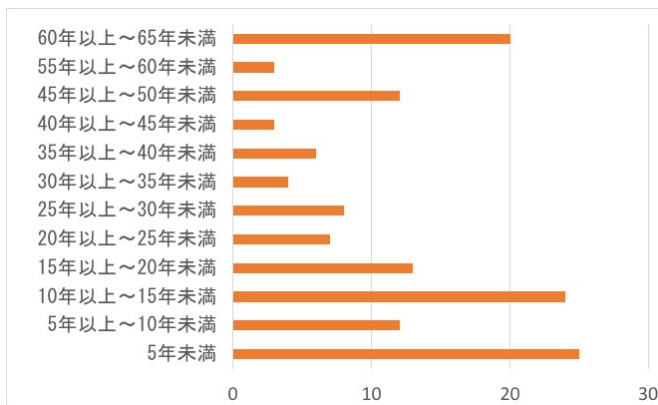


図3 商店街発足以降の営業年数

##### 3) 商店街振興への取り組み状況

春・秋のすずらんまつり（5、10月）。中元・歳末大売出し（7、12月）。理事会として月1回、総会で年1回新規店舗を扱う不動産から情報提供してもらったり、商店街組合から入会説明に伺う。

##### 4) 商店街が持続発展してきた理由について

駅を核として発展しており、住宅街にあることから消費者に寄り添い地域密着型の店が多い。また、量販店もあり徒歩圏で生活必需品を揃えることができるのが要因ではないかと思われる。

#### 4.3. 地図情報を用いた店舗の変遷

現在に至る入手可能なゼンリン住宅地図を用いて店舗の変遷に着目し比較した結果、業種でいうと飲食店の変動が多く見られ、特にすずらん商店街のすずらん通り入り口から約100m以内の通り沿いは毎年、最低でも1店舗が変わっており、変動が激しい。一部には商店街の中で移転をしている店舗もあった。

駅前交番は2006年まで北口にあった。小田急OXは2009年に移転しその跡地に経堂コルティが2011年に建設された。商店街発足以前より20店舗が変わらず営業している。以下に列挙する。

松原たばこ店、和菓子 亀屋、河野金物店、島田履物店、アンティーク スタジオみのる、亀井ビル、親栄堂化粧品店、河内屋肉店、但馬屋、焼鳥処 あきた屋、清和堂文具店、パン工房 キムラヤ、遠藤書店、国際電気株式会社、おもちゃのかじやま、内藤ビル、(株) 梶山硝子店、美登利寿司、(有) 木津、昭和信用金庫 経堂支店  
特に島田履物店は小田急開通と同年に開店しており、2017年時点で創立89年の老舗である。

#### 5. まとめ

経堂という町が都市としての機能を持ち始めたのはここ70年くらいである。鉄道開通後もまもなく、戦時中に空襲といった被害は一切被らなかったため、土地は豊かで人が集まりやすかった。現すずらん通りである滝坂道は江戸時代以前に整備された街道で当時、田畑ばかりの経堂では最も人の往来がある場所ではないかと思われる。また、小さな宿もあり店も出来始め、この通りが商店街へと発展していったのは必然だと思う。また、地域の特性として住宅街の中を貫いており、近隣の住民にとって生活する上で行動範囲も適度な時間で移動でき、地域密着型の個店が多く親しみやすい。付近の学校への登校ルートでもあり、防犯という役割もこなしている。学生や大人も通るため、商店街は買い物することだけが目的にならないからこそ賑やかに見えるのではないかと思う。